こんにちは、老害(吉村)です。

　せっかくコンパリのレクチャーを書くので、過去のレクチャーとかでもあまり触れられていない周辺的なことを書かせていただきます[[1]](#footnote-1)。ちなみに私としては自分が正しいという自信があるから書いていますけれど、まあ先輩の言うことを鵜呑みにする人はあんまり上手くならないとも言われているので疑ってくれて構いませんよ。

ちなみに、私は前置きやら説明が長くなりがちで、「史上最も話の長い男」と噂されたほどなので先に言わんとすることを大ざっぱに言いますと、「コンパリはSuggestionである。」ということと「Suggestionを支えるのはディス観である」です。ただ、コンパリに行くまで勿体ぶるのでご覚悟を。

コンパリをちょっとはやったことのある人なら、とりあえずいわゆる「三角ロジック」を使うことがディス界では一般的なのは知っていると思います。

　しかし、ひょっとして、ロジックがしっかりしていれば、コンパリアイデアがテーブルで認められるなんて思っていませんか？だとすればそれは誤解です。おそらく、ロジック検証だけでコンパリをしようとする限り、ほとんどのコンパリアイデアは立証されません。

ロジックが確実に示せるのは、「お前ん中ではな」程度のことです。そもそもディスカッションにおいてロジックは立論者の思考をカンファメする機能しかありません。ロジックそのものに強制力などないのです。

ロジックを過信している人は「そんなバカな」と思うでしょう。なので、具体例としてロジックで議論をしてみましょう。

Lesson 1. ロジックに囚われるな

お題は、「吉村はスケベなのか否か」です。

ここで、一つのロジックが提示されたとしましょう。

端的には「吉村は人間だからスケベだ」と言っています。当然ワラントに反論が来るでしょう。「吉村はスケベかもしれんが、人間が皆スケベではないだろう」

吉村は間違いなくスケベですが、わざわざ人間から語り出す変なロジックですね。この対立を軸に考えましょう。

とはいえ、ディス的な思考が身に付いている皆さんなら、まずはvague wordを確認するかもしれません、スケベは明らかにvague wordです。「何を以てスケベと呼ぶのか」と。

Case.1：定義を聞いた場合

そこで、立論者の定義が「ほんの少しでも性的な欲求・関心があればスケベ」だったとしましょう。すると、途端に「人間は皆スケベではない」と反論するのが難しくなります。その意味合いでの「スケベ」で言えば大抵の人間がスケベになるのは、確かに明らかだからです。

一応、「全く性欲の無い人間もいるかもしれん、感情を失った殺し屋とか」などとは言えますが、いつの間にか反論者の方が馬鹿なことを言っているように見えてしまいますね。いくらなんでも特殊な例すぎます。

そして、もしそう言われれば、立論者は「私は一般的な感情を持つ普通の人間について言っています(笑)」と、人間の定義を少し狭めればいいことです。「お前ら人間じゃねえ！」と、生物学的には人間のはずの相手に言う場面もありますから、一部の例外くらいは除いても「大抵の人間」は「人間」と呼べるでしょうし、言うまでもなく吉村は感情を失った殺し屋などではないからです。[[2]](#footnote-2)

さて、困ったことに、定義を確認したら、最初は変に見えたロジックがまともに見えてきました。定義を確認するとロジックは強固になってしまうようです。

では、仮に先に定義を確認せず、「よくわからないから、ロジックを繋げておくれよ」と迫ったとしましょう。

Case.2：ロジックを繋げる場合



との具合に、定義を聞いた場合と内容としては同じことを言われるだけでしょう。ロジックを繋げさせても、先ほど同様「大抵の人間には性欲がある」「性欲があるならばスケベ」ということに反論がしにくいことに変わりはない。

確かに、大抵の人間はちょっとくらいスケベなことを考えるでしょうし、オープン・ムッツリ問わなければ人類皆スケベなのかもしれない。あなたは自分がスケベではないと断言出来ますか？ちなにみに私は自分がスケベだとは断言できます。

***コギト・エルゴ・スケベ*** (我思う、故に、我スケベ)[[3]](#footnote-3)

さて、一度議論を中断します。ここまでで重要な点は、「**ロジックを繋げることは定義を確認するのと同じことである**」です。結局のところ情報の不足をロジックで確認するか定義を確認するかの手段的な違いです。

例えばSOHのTG=awというデータセンテンスにしても、実は多くのロジックによって成り立っています。例えば、テーブルで現地調査するわけではないですからTGの存在さえEvidenceをもとにした推論、いわば論理的思考なのです。大抵わざわざ聞かないし聞かれてもさらっと答えるというだけで、ロジックで答えることもできるのです。

①どうして医療問題の中からpatientをその範囲に限定したのか、

　　→TGの限定理由はこのTGならAD>DAになるというオピメの仮説[[4]](#footnote-4)

②このTGが存在すると言える根拠は何か、

　　→TGが存在する根拠はevidenceへの信頼[[5]](#footnote-5)

③このTGは本当にそのwillを持つのか

　　→willはこのsituationなら大抵は嫌なはずという推察

などが理由付けになり、ロジックでも説明できます。

意図的な発言には根拠があり、全てロジックで表現することは可能です。定義に限らず、suggestionでもQ[[6]](#footnote-6)でもanswerでも、カンファメ以外は全て主張なのでロジックに出来ます。これは逆に、テーブル内の常識・慣習・裁量が暗に共有されているレベルのロジックがスキップされているに過ぎません。単語や文には様々な明言されない情報が集約されるのです。だからまず、**ほとんどのロジックは最初から裁量によって省略されています**。

先のスケベロジックでは、「吉村は人間だからスケベ」から「人間は性欲があるからスケベ」が掘り下げられる。すると、例外的な「性欲を持たない人間」がいるとすればロジックが示す「人間」から排除され、ロジックが成立するために「吉村は性欲を持つ人間だからスケベ」へと全体の意味合いが変化します。こんな内容は一つのロジックで出来るはずです。一つにまとめにくい時もありますが、この「吉村＝人間＝感情＝性欲」なんて当たり前の連結は省略し、「性欲があればスケベ」に論点を周りが絞ってやることは裁量でできるはずです。

ロジックは数珠繋ぎに「出来る」だけで、数珠繋ぎにすることが必ずしも「良い」わけではないのです。定義やプレゼンで言わんとすることが伝わり、誰もが同意する連結なら、ロジックさえ必要ない時の方がほとんどです。「ロジックに囚われるな」と言いたい。論理学で文を「**命題**」って呼んでいるのを見たことがありませんか？あれは超簡単に言うと「**文ではなく内容で見ろ**」ってことです。

Case.3：Objectionの場合

では、先のスケベ議論に戻りましょう。今度は反論をロジックで出したとします。「性欲があるのはスケベではない」というロジックを組むとしましょう。

例えば、「性欲があってもエロ以外のこともちゃんと考える、それならスケベじゃあないよ」とします。確かに吉村にも賢者タイムくらいはある。賢者吉村はスケベとは程遠い存在です。

　しかし、この場合、また反論が重なってくるはずです。「エロ以外のことを考えてもスケベはスケベ、皆おっぱいに関心があるのだからね」といった反論がきました。確かに皆おっぱいは物心ついたころから好きです。賢者タイムであっても目の前にすごいおっぱいが出てきたら冷静でいられるかわかりません。

そろそろこのままやっても無駄なことは皆さん感じていると思います。話題からして不毛なことはご容赦ください。

例えば「おっぱいへの関心なんて結局性欲のトートロジーじゃあないか、反論できていない！」とロジックそのものにケチをつけたとしましょう。ありがちですね。

しかし、「そりゃあ僕は最初からエロ以外を考えてもスケベだって言っているじゃあないか、少しでも性欲があればスケベだって。そもそも反論できてないのは君の方だよ」なんて言われたらどうしますか？筋は通っているように見える。

もっともらしく見えた反論なのに通らない。どうしてこんな平行線の対立が起きるのでしょうか。既にわかっている人もいると思いますが、これはそもそも前提の内容が噛みあっていないのです。「性欲がある＝スケベ」派は、最初から一貫して「人類皆スケベ論」を基にしています。だからわざわざ人間なんて言葉を使ったのでしょう。最初からわかりきっています。対して、反論者は一部の人間だけを「スケベ」と呼ぼうとしている。一見反論しているように見えたでしょうが、実は相手のロジックに直接は反論できていなかったのです。

立論者の「性欲があればスケベ」を「AはB」としたとき、「文章」で見れば「AはBではない」を言っていますが、「**内容**」で見れば別のこと、「AはCではない」と言っているようなものです[[7]](#footnote-7)。いわば「スケベ」の示す内容が違います。

かといって、立論者の定義によるワラント「性欲がある人＝スケベ」に反論の余地があるかというと、困ったことにありません。立論者の定義・視点を用いれば「性欲がある」と「スケベ」は結局のところ同義だからです。吉村に性欲がある限りは直接反論することなど不可能です。

では、そもそもこのロジックの使い方が間違っているのではないか。ここまで読んでもしそう思った方がいれば、それは鋭い視点です。実を言うと立論者も若干アンフェアなことをしています。

というかディス界のロジックの使い方はもともとちょっとおかしいのです。ただ、間違っているわけではありません。間違いなく三段論法ですが、三段論法の使い方や機能を知らずにロジックを検証しています。

・三段論法のお勉強

ディス界が三角ロジックと呼んでいるモノは、実際のところ三段論法です[[8]](#footnote-8)。

『北斗の拳』で考えるアリストテレスの三段論法

大前提)　秘孔を突かれた人間(中概念M)は必ず死ぬ(述語P) [[9]](#footnote-9)

小前提)　お前(主語S)は秘孔を突かれた(M)

結論)　よって、「お前はもう死んでいる」(S-P)



　なぜ『北斗の拳』で考えるのかと言うと、一つの完結した世界のため、疑いようのないルールが設定としてあるからです。つまりは揺るぎない「大前提」の存在です。

　上記の「お前はもう死んでいる三段論法」を私たちの三角ロジックにするとデータが「小前提」、ワラントが「大前提」となりますが、これだと「大前提」も一般的には「データ」と呼べそうです。あらためて、データとは何か、ワラントとは何かを考えてみましょう。

　「小前提」のイメージとしては「**結論の主語(S)のカテゴリー(M)としての情報・判断**」です。主語を何かしらのカテゴリーに入れます。主語(S)が人なら、「**ある人(S)は(M)な人である**」という意味合いの情報が小前提です。もちろんサドやマゾのことではありませんよ。→「お前(S)は秘孔を突かれた人間(M)にあたる」

結論の主語として言及される目の前にある事、取り扱う事に関する「データ」です。

　「大前提」のイメージは「**カテゴリー(M)が共通して持つパターンや法則性(P)**」の情報・判断です。結論(S)の主語を人に置く場合、「**全ての(M)な人は(P)になる(条件を満たしている)**」という意味合いの原理・情報・判断になります。特定のM性癖の人がピー(放送禁止用語)なことをするのではありませんよ。→「全ての秘孔を突かれた人間(M)は死ぬ(P)」

特定の個体や集団に限らず、M属性のものは全てPになるという法則的な話になるので、「大きい前提」なわけです。対して法則に組み込まれる個別の主語の情報は「小」です。

ここで言えば、「お前」は「秘孔を突かれたお前」であり、「秘孔をつかれたお前」は「死人になるお前」と、結局はロジックの構成要素が全て「お前」に連結できる[[10]](#footnote-10)。この連結の確認がロジックになりますが、言うまでもない連結は省略される。

前頁の場面でのケンシロウは決め台詞として言っただけで、「お前がもう死んでいる」ことを明確に理解させたいわけではないので結論しか言っていません。しかしケンシロウは聞かれさえすれば、すぐ死ぬだけの敵にもロジカルに秘孔の説明をしてあげる場面も多いです[[11]](#footnote-11)。

しかし、**三段論法は「この前提からは必ずこの結論が出るため、前提が真ならば結論は真になり、前提が偽なら偽になる」というフォーマット(公式)でしかありません**。

本来この公式自体に前提の真偽を問う機能はありません。真の前提を代入することで結論が真になる公式です。数学の公式と一緒です、四角形の面積「縦×横」と同じく、縦と横に数字を代入すれば面積を確認できるだけで、縦と横が何センチかを判断する機能はないのです。底辺と高さの計測が正しければ、導き出される面積も正しい。これだけのものです[[12]](#footnote-12)。

しかし、言葉というのは難しいもので、SやPに別の解釈の余地がある場合、ロジックは命題自体が曖昧なものになります。

例えば、『北斗の拳』の主張「お前はもう死んでいる」の言葉に注目すると、生物学的には偽です。「S：お前」が受け答えをしていることからも生物学的には「まだ生きている」ので、正確には「P：数秒後に死ぬことが確定している状態」と言うべきでしょう。とはいえ、ケンシロウだってそれはわかっているでしょうから、「P：もう死んでいる(に等しい)」という意味合いは状況から読者もわかりますし、漫画での言い回しにケチをつけるのも野暮です。ケンシロウが自分から自分の言い方で主張する分には一人の問題ですし、言葉としてまともに伝わる分にはS・M・Pのラベルと内容はケンシロウ自由に出来ます。

一方、議論において「主張：SはP」は何かしらの「問い：SはPか？」への答えです。なんの脈絡もなく「お前はもう死んでいる」とか「吉村はスケベだ」なんて言い出したら変な人です。Mは自分が持ち出す概念なので立論者の解釈を通すことが出来ますし、「問い」が個人的な質問などへの解答であれば質問者の解釈でS・Pの意味も統一できます。しかし、お題やお題が必要とする小題など、特定の質問者が存在しない「問い」の「S・P」は個人に定義決定権がありません。だから解釈に余地があると平行線が起きるのです。

これを踏まえてスケベ議論のobjectionを思い返してみてください。「人間(M)はスケベ(P1)」を反論しようとしても、結局は「人間(M)はスケベ(P2)ではない」としか言えませんでした。P1とP2は内容が違うので「MはP1でない」と言えていないので反論になりません。しかし一方、お題の「吉村(S)はスケベ(P)か？」に、立論者の「吉村は(S)はスケベ(P1)」が答えられているとも言い切れないのです。なぜなら、お題がテーブルで「スケベ(P)」を定義しないまま議論が始まったからです。これが、出されたロジックをただ検証しても意味が無い理由です。

とはいえ、求められる答え「S・P」のSやPの定義が最初から曖昧な以上、ロジックを求められた立論者も自分の定義「S1(≒S)・P1(≒P)」でロジックを組むしかありませんから、「それは違うぞ！」ともはっきりは言えないし、言ったところで他のロジックにさせても同じことが起きます。

勘の良い人は最初から立論者が勝手にSを定義したことに気が付いていたでしょうが、私は立論者が勝手に定義をしていることについてあえて言及しませんでした。気が付かなかった人は既にロジックに惑わされてきたという証拠です。

お題の「吉村(S)」でさえ、私が吉村であり、これを書いている私が例題として出しているからあなたたちは私(S1)のことだと判断したでしょうが、お題も私もこの「吉村」が私自身のことであるなんて一言も言っていません。読み返すとわかると思いますが、私はしっかり「私」と「吉村」で書き分けていました。だから私とは別の「吉村姓の人(S2)」を小前提に持ってきてもお題には「(個人目線で)答えられる」のです。

同様に、「スケベ(P)」に関しても、スケベと呼ぶ基準は明らかにされていませんから、「スケベ(P)」を「性欲がゼロではない人(P1)」と解釈し、大前提を「人間(M)はスケベ(P1)」にしても「答えられる」のです。立論者はこれで答えられていると思っているから、ロジックを掘り下げても最終的には「性欲がある人(M')=スケベ(P1)」と本人の中では「性欲がある=性欲がゼロでない人」のトートロジーしか言えません。でもお題のPをP2で考える周りの人には「答えられていない」と感じるのです。

「慶應大考古学教授の吉村作治先生(S2)は人間(M)である」は、真か偽かでは当然真であるし、「人間(M)は性欲がある(P1)」も真で、その結論「S2=P1」は真であり、お題「吉村(S)はスケベ(P)」も立論者にとって真である。その一方で、「S1(吉村勇哉)はP2(エロしか考えない)」の解釈でお題「吉村はスケベか」を見る人にとっては、そもそもお題に全く関係のないロジックです。これが議論におけるロジックの限界です。この仕組みをわかってないと、反論できないのに納得できず平行線になる状況を生みます。思い当たる節がある人も多いのではないでしょうか。

Case.4：お題を明確にした場合

では、お題が最初から明確にされていればいいのでしょうか？これはこれで実は問題があります。

例えば、お題の「吉村はスケベか否か」が、「吉村＝このレクチャーの筆者吉村勇哉」でスケベの条件が「エロタレスト[[13]](#footnote-13)をブックマークしている」みたいに明確だったとしましょう。もう私は完全にスケベとしか言い様がなくなり議論の余地が無くなります。実際にブックマークしているからです。私がエロタレストをブックマークしていると公に白状した瞬間、論題として議論する価値は無くなります。結論がわかり切っているからです。「スケベ＝性欲がゼロではない」でも、「スケベ＝エロ以外を一切考えない」でも、言うまでもなく結論は見えているので同じことです。数学のように完璧な証明ができる「お題」は議論にしようがありません。お題にはある程度「曖昧さ」が無ければ議論にはなりません。

ディスカッションにおけるロジックの機能

揺るぎない事実・法則など解釈の余地が無い「S＝M」と「M＝P」で構成できる場合、ロジックを認めないのは単なる情報・知識の不足です。Evidenceなどで全て解決します。しかし揺るぎない前提を繋げていけば立証される、これが本来の「三段論法」であり「演繹」と言われる推論方法です。事実を繋げるだけなのでもともと反論の余地はありません。

議論・討論においては、最初から前提を必ずしも揺るぎない物にはできないので、本当の意味での「証明」もできません。出来るとすればむしろ論題が悪い。だからロジックの構成は大前提・小前提・結論の演繹的「三段論法」ではなく、データ・ワラント・クレームの帰納的「三角ロジック」が必要で、これがわかっているディベートセクションではお互いのロジックの中に矛盾でも無い限り、根拠(ワラント)を「強める」ことと「削る」ことで自身のロジックの説得力を相対的に増すことしかしません。議論とはもともとそういうものです。議論は本来、論者各自の前提の提案です。ディベートは中立的第三者のオブザーバーに賛成派・反対派が提案し合っているだけで、ディスカッションはその提案・説得の相手が異なるだけです。もちろん説得する相手が必ずしも中立的・客観的でないため、提案の性質はディベートとは異なってきますが、結局は「提案」です。よって、ロジックの形にすることは、単なる自分の思考のカンファメです。このカンファメされる自分の思考・捉え方に周りを巻き込む必要があります。

そう、つまり、ロジック検証に必要なのは「Shouldの視点」です。これがないロジック立論やロジック検証は無意味です。

先に言った通り、SやPが曖昧な場合、ロジックを出せと言われても立論者各自の解釈で「S・P」を定義するしかありません。そういうとき、私たちのロジックには、「(S) should be (Sn)」や「(P) should be (Pn)」の提案を主張とするサブロジックの視点が必要なのです。ただ、いちいち検証ステップを増やせと言っているのではなく、とりあえずここではこの視点を持て、と言っておきます。これを三段論法や既存のロジックの考え方にあて当てはめると、下記のようなイメージです。

「小前提は真」、「大前提は真」という本来の三段論法の検証法を「データを認めるべき」、「ワラントを認めるべき」というテーブル目線に変換し、別のS解釈P解釈による平行線になる場合は、Shouldとして支えるロジックを組んでSuggestionとするわけです。当然「Should」に強制力などなく、説得力の勝負です。

しかし、まだ問題があります。ここまでやってきた「吉村スケベ論争」は目的やら判断基準としての前提条件が少なすぎて提案的なサブロジックを組めません。となると、この議論はその背景によるでしょう。

ディス界の皆さんがやるとすれば、吉村(S)の定義は、ここで共通して知っている人である私のこととするのは妥当でしょう。私より有名な吉村さんが現役にいれば別ですが。

スケベに関してはもしもテーブルの状況が、合コンとかの賑やかしの会話に過ぎないのであったなら、「人類皆スケベ」の方が、そのあと下ネタが話しやすくなりそうでニーズにも答えられるでしょう。一方、もし自分の意見で議論がしたい集まり(大会)なら、「性欲があるだけでスケベ」や「エロ以外考えていない」でも結論は明らかなのでニーズがない。この場合はお題を「吉村は平均以上の性欲か」とでも捉え、平均よりスケベな要素と平均よりスケベでない要素を出しあっていくのが一番ニーズに答えられそうです。いわばコンパリのような議論形式です。

このサブロジックを、普段はある程度支えてくれるのが私たちのNarrowingです。そう、次もまだコンパリに行かずNarrowingです。(笑)

1. ついでに今まで自分が読んできたレクチャーとはなるべく違うことを書こうとしたら長くなってしまいました。 [↑](#footnote-ref-1)
2. 「自分は実は天界を追われた堕天使」そう思っていた時期が僕にもありました。 [↑](#footnote-ref-2)
3. 「この世界や私が本当に存在していることさえ疑わしいが、自分の思考がスケベであることは疑いようがなく、我はスケベであることだけははっきりしている」という意 [↑](#footnote-ref-3)
4. 大抵、本当はモデルオピシなら選ばれやすいという打算ですけどね。 [↑](#footnote-ref-4)
5. 学生レベルの中ではいちいち聞かないけど、国会とかで「新聞で読んだのですが○○だそうです」なんて言ったら野次の嵐でしょうね。 [↑](#footnote-ref-5)
6. 「これが聞きたい、なぜならば…」「これをオピメは答えるべきだ、なぜならば…」限られた時間で何でも質問に答えるわけにはいきませんから、意図がわからない質問は意図や必要性を聞かれますよね。つまり質問の意図や必要性もロジックです。聞いてもto understand clearlyとかですが。 [↑](#footnote-ref-6)
7. 普段のディスを思い返してみてください、大抵のObjectionはこのように「AはB」に「AはCではない」をラベルで誤魔化しているだけではありませんか？ [↑](#footnote-ref-7)
8. 三段論法はアリストテレスが作ったものですが、三角ロジックはトゥールミンという人が作った主張(Claim)・根拠(Data)・論拠(Warrant)に「分けて」考えるモデルです。とはいえ、ごっちゃにすること自体は正直あんまり問題ないです [↑](#footnote-ref-8)
9. 秘孔を突かれても、別の秘孔を突いたり、秘孔の周りの細胞を火で焼き殺したり、何かしらの手段で無効化される場合もありましたが、秘孔を突かれてから何もしなければ死ぬ設定です。このあとこのでかいやつの身体は破裂します [↑](#footnote-ref-9)
10. 「美味しいパスタ作ったお前」→「家庭的な女のお前」→「俺のタイプのお前」→「俺ベタ惚れのお前」で目を閉じれば億千の星でも、結局パスタとか星は重要ではないのです。家庭的だから惚れたのです。 [↑](#footnote-ref-10)
11. ちなみに、秘孔に情報を追加して「お前は突かれると死ぬ秘孔を突かれた」と小前提(データ)の段で言えば、論理式にはできるものの大前提(ワラント)の段はデータのトートロジーになります。どこのセンテンスで何を説明するかなんていうのは些細な違いです。 [↑](#footnote-ref-11)
12. 論理学を習う前から、アリストテレスが公式を作る前から、更には言語が生まれる前から人間は論理的に思考していました。物事を主語と述語の概念で考えていて、主語と述語の連結の背景には二つを繋ぐ中概念(経験・知識・価値観などで形成される述語の条件)があった。この当たり前のように人間がしていた思考の法則性を公式でカンファメしたもの、これがロジックです。誰もが認める前提が組み込まれれば、人間は同じ思考をしているから結論を誰もが認めます。 [↑](#footnote-ref-12)
13. 女子は調べちゃ駄目だよ！何のことかは察してね！！つまり命題で見よう。 [↑](#footnote-ref-13)